

ヴォーンの詩の教訓性

——「規則と教訓」を中心に——

船 木 満 洲 夫

ヘンリー・ヴォーンの詩は静謐だということが従来から言われてきた。たとえばこのような指摘がある——「ハーバートの詩の支配的な空気が平穩であるとすれば、ヴォーンの詩のそれはまさしく静けさそのものだ。彼は信心深い英国国教徒だったけれども、礼式や儀式の活動にハーバートほど依存しなかった。彼の賛同した宗教制度がその詩に及ぼした影響は比較的少ない。その叙情詩は実際活動の生活からひねりとった敬虔な黙想の瞬間よりはむしろ、夜間と早朝の邪魔のない観照の時間の成果である」と。この要を得た論述の通り、静かな彼自身の生き方の産物であるヴォーンの詩は、非实际的、非社会的であり、自然および神との関りに自らの境域を拓いたものである。彼が思考よりも驚異の詩人、夢想によって神の国をのぞきこむ詩人であることは、「再生」や「彼らはみんな光の世界に去ってしまった」等^②でよく知られている。ところがそうした静けさの反面、ヴォーンには現世否認の感情とともに、世間を敵視する性向が見られる。そうとなると、十七世紀宗教詩人に特徴的な教訓性は、彼の詩においてはどのような様相のものだろうか、ということが問われてよいように思われる。教訓色の特に著しい詩「規則と教訓」(*Rules and Lessons*)を吟味することによって、ヴォーンの詩の特性に光を投げることができないだろうか。これが本論のねらいとするところである。

散文『オリヴ山』(*The Mount of Olives*)は、祈禱や瞑想の手引きといったものであるが、その本文の前に付した読者への手紙に、ヴォーンはこう書いている——「規則正しい生活のための一般的心得（これに関してはすでに莫大

な量の本が出ている)をこの小冊子にはさむのが必要だとも私は考えなかった。祈禱の代りに、道德論のようなもので読者をわずらわせたくなかったのだ。その上、そういう心得はすでに、私の宗教詩中にできる限り簡略に述べ^③ある」。これを書いたとき、「規則と教訓」を念頭においていたらしい^④。この詩と『オリヴ山』との親近性は疑えないし、「規則正しい生活のための一般的心得」をこれが含むことも確かだが、散文にすら道德論的教訓をさしはさむのをはばかったヴォーンが、簡略にせよそれを扱ったとすれば、詩としてどういう結果を生んでいるかが興味を引く。

「規則と教訓」の形式が、ハーバートの「教会の玄関」(*The Church-porch*)^⑤に倣っていることも指摘のある通りだ。「教会の玄関」は全77連(1連6行)の長い教訓詩で、「規則と教訓」(長さはその三分の一足らず)の結構や韻律がそれと似ていることは否定できない。表現や内容の上でも、第11連の施しに関する部分^⑥のほかに、共通する個所がいくつか見出されるだろう。ハーバートが目を神と聖書に向け(「教会の玄関」2連)、心を神に忠実にし(同13連)、天国の門を開いておく(同64連)ように説くのは、ヴォーンの詩にも通じる主な例である。しかし同じくキリスト教詩といっても、ハーバートが日常生活に即した教えを説くのに対して、ヴォーンの詩行はそうしたことに触れる場合も、絶えず高い次元に離れる傾きがある。ハーバートが公的な祈りを重視する(同67連)のは、ヴォーンの朝晩の祈りの色合いと対比して、両者の相違をきわだたて示すものではなかろうか。ハーバートのほかの詩からの流入(「規則と教訓」8, 9, 20, 21, 24連)に関しては、L. C. Martin の 'Commentary' や A. Rudrum の 'Notes' に明かであるが、これらについても本論との関連で言及することになろう。ハーバートとの比較は、借り入れの多いヴォーンの詩を解釈する上で、一つの宿命のように思われる^⑦。

前述の『オリヴ山』とハーバートの作品との関係も密接である^⑧。「教会の玄関」からも71連が引用されているし、また『オリヴ山』の末尾の「いと高きところでは神に栄光あれ、地の上では御心にかなる人に平和あれ」(「ルカ伝」2章14節)と、「神にのみ祝福あれ／三位一体の神に三重の祝福あれ」^⑨は、いず

れもハーバートの詩集『聖堂』(*The Temple*)の結びの言葉である^⑩。あとで見るように、「規則と教訓」の最終連においても、ハーバートの一つの詩に倣って聖書の句を引いている。聖書とハーバートの詩が、ヴォーンにとって権威ある裏づけとして使われているのである。

「規則と教訓」の主題は神の道を一途に進むことにあり、そのために生活のかなめの役を果たすのが、「目を覚まして祈る」という一事だと解してよいのではないと思う。この詩で「目」につづいてすぐ「魂」に言及するのも(1, 22連)、そういう意味で何がしかのことを暗示するかもしれない。目は神の国と神のわざに向けるべきであり、そして魂は神の道にかなうのでなければならない。神の国と人間との間には早朝という交わりの時刻があり、夜になれば一日の行動を反省して、両方の間を見通しよくせねばならぬ。神の国と人の世とは背反するのであり、何よりもまず神に通じ神にゆだねる生き方が肝要だ。抑止さるべきは罪であり、隔絶さるべきはこの世の心労や愚行である。こうした方向への導き手が宗教であり、そして朝晩の祈りが大事だということになる。

さてしかしヴォーンには、主題を守り通さないという例の癖がある^⑪。「規則と教訓」全24連はいくつに区分して考えるのがよいだろうか。彼の特色を考慮すれば、初め5連、終り7連(2+4+1連)、その中間部の三つに分けることができようか。夜明け前から始まって夜に至る詩なのだが、第6連以下は、第18連になって真昼の過ぎたことが告げられるまで、時間の推移と無関係に展開し、そのために著しくつり合いを損なう結果を招いている。このことはあとでもとり上げることになろう。ハーバートの「教会の玄関」に形式を倣ったというものの、その詩が前置きとまとめの要約を冒頭と末尾にきちんとおいているのに対して、「規則と教訓」は前置きなしにと言おうか、明け方がそのまま導入となって始まり、そして日暮れから夜の結びに至り、最後の要約は一応ハーバートの形式に倣っている。明け方と日暮れから夜への時間帯にのめりこむ詩人なのである。そこには、現世という昼間の虚偽の光に目をそむける姿勢がのぞいてはいしまいか。にもかかわらず、現世の生活の教訓に多くを割かねば

ならぬところに、この教訓詩の詩としての問題が見出されよう。

「まず目が開いたら、魂も同じように／開くにまかせよ」(When first thy Eies unveil, give thy Soul leave / To do the like) と詩人は歌い出す。前述のように目と魂の連動であり、魂の向けるべき方向は神にある。

True hearts spread, and heave

Unto their God, as flow'rs do to the Sun.

花が太陽に向かってそうするように

真実の心は神に向かって胸を広げ頭をもたげる。

心が真摯に神に向かう姿態の比喩として、太陽に向かう花に照応を見出すのがヴォーン的である(「彼から去ったアモレットに」, 「朝番」等を想起させる)。まず最初に心を神に向けることによって、神との交わりが一日中つづき、そして「神の中に眠る」(in him sleep), そういう生活を読者に求めるのである。ヴォーンの最も代表的な詩^⑬「朝番」と「夜」がともに、その最後に神の中に住むのを願っていることを指摘しておきたい。彼の志向の眼目と言うべきであろう。彼の特質を最もよく表わす詩に数えられる^⑭「鶏鳴」で、「あなたの外で眠ることは／死ぬことである」(To sleep without thee, is to die) と神に話しかけているのも思い出される。このように冒頭に心の方向づけが、ヴォーンの本質の内奥においてなされているのに気づく。第2連になると、その最後の'sleep'の語を引きついで、太陽が昇るまで眠ってはならぬと詩人は逆方向に転換する。「祈りが／夜明けとともに始まるべきだし、天国と人間との間には／決まった荘厳な時刻がある」(Prayer shou'd / Dawn with the day; There are set, awful hours / 'Twixt heaven, and us) との考えからである。神に向かうのは、祈って神の国を求めることを意味する。太陽が出てマナ(Manna)が溶けてからでは遅い(「出エジプト記」16章19—21節)。

Rise to prevent the Sun; sleep doth sins glut,
And heav'ns gate opens, when this world's is shut.

太陽に先んじて起きよ。眠りは罪を満腹させるし
この世の門が閉じるとき天国の門は開くのだから。

神に対する畏怖と服従の道は現世の罪の道と相容れない。朝の目覚めに睡眠を戒めるのは、睡眠が真の光とは反対の罪と死の現世に属するからであろう。

『オリヴ山』の最初の「朝の祈りのための戒め」(Admonitions for *Morning-Prayer*)に、これと符合する文章がある——「夜はそれ故(クリュソストモスが言っているのだが)眠って過ごすためにも、また無為に過ごすためにも作られたのではない」、「世界中が寝静まっているとき、あなたは目を覚まし、涙を流し、祈らなければならない……」、「神に感謝を捧げるために太陽の先を越し、明け方に祈らねばならない(「ソロモンの知恵」16章)。イスラエルの人々がマナを集めたのは朝であった……それ故、起きるとすぐに神を汚す世俗的な思いをすべて締め出して、何よりも神をまず中に通すようにせよ^⑤」。このように内容が一致し、「戒め」のそのあとの箇所では、眠りが罪であり死の領域に属することもほのめかされる。「規則と教訓」の冒頭で、夜明け前の時刻、祈り、神との交わりを第一に強調するとき、いかにヴォーンの中心的思想が具現されているかが以上から理解されよう。またそこに『オリヴ山』と共通の聖書の文句があずかっている点も見逃せない。この詩が最初から、詩人の特に好む聖書の言葉によって強化されているということである。

神との交わりについてヴォーンが説くのが自然の被造物との交わりである。「あなたの仲間とともに歩け」(Walk with thy fellow-creatures)で始まる第3連は、次の有名な詩行を含む。

There's not a *Spring*,
Or *Leafe* but hath his *Morning-hymn*; Each *Bush*

And Oak doth know I AM.

朝の賛歌をもため

泉も木の葉もない。どのかん木も

かしの木もわれありを知る。

このところは「墮落」の「どのかん木もいほりも／どのかしの木も道路も天使を知っていた」(Each Bush, and Cel, / Each Oke, and high-way knew them)——さらには「宗教」の最初の二連——を想起させ(これらの個所にハーバートの「衰退」*Decay*のエコーが指摘されている^⑧)、それらを考え合わせると、自然の被造物における天使との交わりを含意していると考えられる。「規則と教訓」が表面上はハーバートの「教会の玄関」を模倣していても、ヴォーンの声をはっきり聞こえる例として、16連の2行(II. 95-96)とともに、この詩行を挙げている学者もある^⑨。ここの「われあり」(「出エジプト記」3章14節に典拠あり^⑩)は、自分自身に対して完全に現在の、従って歓びの存在を表わすであろう。そういう自然の被造物の声に聞き入り、歓びの賛歌を歌う方向を詩人は指示するのである。このあと「おお、思い煩いや愚かさを捨てよ」(O leave thy Cares, and follies!)とつづけるが、これも自然から学ぶべきことにちがいない。現世とは反対の方向である。第4連では、ヤコブがある人と夜明けまで組み打ちして勝ち、その人から祝福されたという「創世紀」(32章24—30節^⑪)に関連の詩行(II. 19-22)に、「すべてを神にゆだねよ」(resigne / The whole unto him)との言葉をはさんでいる。『オリヴ山』の「朝の祈りのための戒め」の中に、「このために私の体も心も、その両方にお与え下さったすべての能力も、ここに全能のあなたの手の中にゆだねます。それらがあなたのおきてのわざをなし、私の目をあらゆる一時的な事物から永遠なるものへ、この世の思い煩いや思い上がりから空の鳥や野の百合へ向けるようにお導き下さい^⑫」との神への祈りが記してある。一時的な現世の事物から永遠の自然の存在への転換に、自分のすべてを全能の神にゆだねて、その導きを得ること

が欠かせないのだが、詩ではすべてをゆだねる前に、全力の苦闘によって神の祝福を得る面が強調されている。これは夜明け前の時間が神との接触で重要なこと、また神とのじかの交わりが至難なことを暗示するであろう。しかも実現せねばならぬ交わりである。

Poure Oyle upon the stones, weep for thy sin,
Then journey on, and have an eie to heav'n.

石に油を注ぎ、わが罪のために涙を流せ、
それから旅をつづけて、天に目を注ぐようにせよ。

ヤコブが石に油を注いだのは、「創世記」(28章18節[㊤])ではやはり早朝のことだ。神との接触に感謝し、契りを誓うことを意味するであろうか。旅は現世の旅であろう。ヤコブがそのあと旅をつづけたことの反響が感じられる。「罪のために涙を流す」のと「天に目を注ぐ」のところが、つけ足しのように実はそうではなく、目と魂の向けるべき二方向、俗世の罪と天上の神を並べて明示したものであろう。これから日が昇って世間に出てゆく前の心の基本的整備である。ただ上に引用の『オリヴ山』の部分でもここでも、ヴォーンが目の向けどころをきわ立たせることに終始するのが気にならないでもない。

筆者は先ほどからキルケゴールを連想しているのである。『オリヴ山』から引用の「空の鳥」「野の百合」は、「マタイ伝」(6章24—34節)に出典がある——「何を食べ、何を飲もうかと生命のことを思い煩い、何を着ようかと体のことを思い煩うな。生命は食物にまさり、体は着物にまसारではないか。空の鳥を見よ、播かず、刈らず、倉に収めることもしない……野の百合はいかにして育つかを思え、働きもせず、紡ぎもしない……」。ヴォーンは「人間」と題する詩で、不安定な人間と対照的な安定性の例として鳥と百合をもちこんで、『オリヴ山』同様にそれらを人間の思い煩いの生活と対置している。キルケゴールはどうかと言えば、「百合と鳥とは歓びの教師である。しかも百合と

鳥とが実際にまた思い煩いをもっていることは、自然全体が思い煩いをもっていると同様である^②と論じ、「汝のすべての思い煩いを百合や鳥のなすように、すべて絶対的に神にむかって投げよ」と説く。このように思い煩いを認めた上で、それを神に向かって投げよ、百合や鳥のように神に対する無条件の沈黙と服従のうちに投げよと言う。キルケゴールのこうした実存的な緊迫性がヴォーンには見られない。人の世の思い煩いは隔絶して、神と神の通う自然の被造物に目を向けることの方にアクセントがおかれている。

第5連はこれまでとは独立した感じを与える。教訓形式の中で歌い残しがあったかのように朝をテーマに歌う。命令文を含まないのはこの詩でこの連だけである。「朝は神秘だ」(*Mornings are Mysteries*)と言う。朝の誕生の時間には、人間の原初期から未来に至るまでが包蔵されているのであり、このあたりの表現は一日と人の一生と人類の歴史とが重なり合っている——「少年時代」という詩の「神秘の時代よ、！」(*An age of mysteries!*)を想起させる。

The Crown of life, light, truth
Is stil'd their *starre*, the *stone*, and *hidden food*.

生命と光と真理の冠が
星や石や隠された食物に型どられている。

「ヨハネ黙示録」(2章10節)に「生命の冠」の句が見える。「石や隠された食物」に関しては、同じく(2章17節)「勝利を得る者には、隠されたマナを与えよう。また受ける者のほかはだれも知らない新しい名が書いてある白い石を与えよう」が典拠になっている^③。「星」は同じく(2章28節)「明けの明星」を指すのではあるまいか。この星、石、マナは、御霊の言葉を聞いて勝利を得る者に与えらるべきものとして、永遠の生命、光、真理を表わすのであろう。これらの祝福が朝には随伴するとヴォーンは考えるのであり、ここには聖書の神秘主義との融合を認めることができよう。

さて現実の世間を相手とするとなると詩のうま味が減じるのは、ヴォーンの世間敵視の姿勢と関係があるろうか。『オリヴ山』ではこう述べている——「家から出かけようとするときは、世間の中に入って敵と交わるのだということを忘れないようにせよ。世間は荒れ野以外の何であろう^⑧」と。ヴォーンの敵視は意外と激しいのである。「規則と教訓」で、「腹を立てないようにせよ」(Keep thou thy temper, 6連), 「自分の地歩を守れ」(Keep thou thy ground, 8連), 「自分の確かな歩調を固守せよ」(stick thou / To thy sure trot, 9連)と強調するのも、世間を危険視する表われにほかならない。神を求め神に従おうとする激しさの逆の面である。ヴォーンは言う——「それらの苦労はあなたの外部にとどめて、心は／神だけのものとせよ」(keep those cares without thee, let the heart / Be Gods alone, 6連)と。前述の「すべての思い煩いを神に投げよ」とのキルケゴールの立場では、思い煩いはこの世の生活に密着したもので、それを神に向かって投げるとは、それから脱するための内面の極度の集中を意味する。これに比してヴォーンは、外の思い煩いと内の神とを分離し、思い煩いをいわば隔離して、内面の聖域を純粹に保持しようとする。現世に対して神を囲うのである。現世と神との背反におけるヴォーンの場合を見ることができよう。現実生活での真実、正直、施し、言葉づかい等にも言及するが、神と宗教に従うよう求める線は一貫していても、全体に道徳的な陳腐さが否定すべくもない。施しの報いについて、「水はくねって流れようと／われわれの投げるパンは、いつか船荷となってもどってくる」(Though waters stray, / The Bread we cast returns in fraughts one day, 11連)と述べるとき、「伝道の書」(11章1節)^⑨の典拠「あなたのパンを水の上に投げよ、多くの日の後、あなたはそれを得るだろうから」と比較して、内容も表現もどれほど独自の生かされ方をしているだろうか。聖書にヴォーンが依存するには、その場所を得ていないように思われる。この詩で日が昇ってから夕方になるまでの、聖書の典拠が明確な唯一の個所がこれである。実際的な道徳を説くのが得手の詩人ではない。

むしろそれから離れて信仰を強める観点から、「神のわざを見つめよ」

(Observe God in his works) と言って、自然と自然現象に読者の目を向けようとするとき (15, 16連)、ヴォーンの詩行は活気を帯びてくる。大自然の一つ一つの事物、それを指し示す語の連発が小気味がいい。瞬時の動きにも一日や四季の変化にも、自然の姿は神のわざと方法をありありと映しているのであり、詩人の指示は昼と夜、光と闇に至る。そのまとめのカブレットとして

Thou canst not misse his Praise; Each *tree, herb, flowre*
Are shadows of his *wisedome*, and his Pow'r.

あなたは神の賛美を見落としはできぬ。どの木も草も花も
神の知恵とその力の投影なのだから。

自然の個々の被造物に神の働きを見るのが詩人ヴォーンの本領であり、時間と前後の關係に構いなく、ここの2連でも扱わずにはおれなかったかのようだ。實際的な教訓を述べようとするのに、そろそろ飽きが来ていたのかもしれない。次の17連が内容的にいささか遊離してしまっている。

前述のようにこの詩は朝から真昼へ、真昼から夜へ進むとはいふものの、初めの朝の部分と終りの夜の部分 (20連以下) では詩人の時間の意識が明確なのに対して、真昼までの中間部はそうではなく、しかも真昼が過ぎたことを知らされても (18連)、つづく2連は夜への前準備の意味しかもたない。こうして全体に時間的な不つり合いをもたらしめている。朝と夜のこの詩人は、明け方と同様に時間の衰微する日暮れに格別の関心を示す。そこに人間の一生の推移を読む。一日の経過に人間の一生が重なってくるのである。^⑧

The Sun now stoops, and hasts his beams to hide
Under the dark, and melancholy Earth.

今や太陽は傾き、そして急いでその光線を

暗く憂うつな大地の下に隠そうとする。

この日暮れのヴォーン一流の描写につづく教訓的観念は——「すべてがあなたの終りの序曲にすぎない。あなたは／上昇、絶頂、下降が短期に終わる人間なのだ」(All but preludes thy End. Thou art the man / Whose *Rise, height, and Descent* is but a span)。このように太陽の一日の推移に、時間的存在である人間の一日と一生がオーバーラップし、詩は俄然終曲へと傾くのである。日暮れの光線が、人間の生活と生涯の含蓄に引きこまれて、次の19連では、「あなたの輝きを／すべて家にもち帰れ。明かりを整えて、油を買い／それから出かけよ。このように用意のできている者は、没落が／その輝く栄光を助長し、死をうちくじくのだ」(Have all / Thy Beams home with thee: trim thy *Lamp*, buy *Oyl*, / And then set forth; who is thus drest, The *Fall* / Furthers his glory, and gives death the foyl) と言う。神的な光輝によって夜と死が超克されるという考えである。「明かりを整えて、油を買い」の句は、「マタイ伝」(25章1—13節)の10人の処女の寓話のアルージョンである^⑧。そこでは花婿を迎える話は天国のたとえになっていて、そうした用意は主を迎えることに関連する。用意をして眠った5人の賢い処女たちは、夜中に来た花婿との婚宴に至るのである。この連が眠りと天国への準備を含むことが明らかであろう。聖書では寓話の終りに、「だから目を覚ましておれ。人の子の来るその日その時があなた方にはわからないのだから^⑨」と説かれている(前章にも同様の言葉あり)。そうとなると、ここの詩行には主を迎える用意と併せて、詩の中心テーマの‘Watch’が背後で関っている。寓話の眠りのことは表面に出していない。このように、一日が日没で終わるに際して聖書による補強を得ている。夜を前にして人間の時間的考察が深められ、それが死へ傾斜することともに注目すべきだと思う。この連は次のカプレットで結ばれる。

Man is a *Summers day*; whose youth, and fire

Cool to a glorious *Evening*, and *Expire*.

人間は夏の一日だ。その若さと火は
莊嚴に輝く夕べに冷えて絶え果てる。

視点が一日の経過から人間の生活と生涯に移行し、ここに神の栄光の介在がほのめかされているのが読めはしないだろうか。太陽の光線が人間の光輝へ転じ、そして人間の栄光が神の栄光へと通うのである（上に引用の ‘his beams’ ‘Thy Beams’ ‘his glory’ ‘glorious’ に注意）。以上の両連では人間（‘the man’ ‘Man’）が主題にのぼっている。日没と人間の没落が鮮やかに結合しているのではないか。

いよいよ夜である。ハーバートの「教会の玄関」と比較するために、「規則と教訓」の20、21連と最後の24連を引いておきたい。

When night comes, list thy deeds; make plain the way
’Twixt Heaven, and thee; block it not with delays,
But perfect all before thou sleep’st; Then say
Ther’s one Sun more strung on my Bead of days.

What’s good score up for Joy; The bad wel scann’d
Wash off with tears, and get thy *Masters* hand.

Thy Accounts thus made, spend in the grave one houre
Before thy time; Be not a stranger there
Where thou may’st sleep whole ages; Lifes poor flower
Lasts not a night sometimes. Bad spirits fear
This Conversation; But the good man lyes
Intombed many days before he dyes.

夜が来たら、あなたのした行為を数え上げ、天国とあなたとの
間の見通しをよくせよ。ぐずぐずして道をふさがずに
眠る前にすべてをやり遂げよ。それから言え――

「私の日々の数珠に通されたもう一つの太陽がある」と。

よいことは喜びのために記録し、悪いことは充分吟味して
涙で洗い落とし、そしてあなたの主の承諾を得よ。

こうして勘定の清算が終わったら、早めに一時間
墓の中で過ごすがいい。いつまでも眠ることになるかもしれぬのだから
墓の門外漢であってはいけな。この世のあわれな花は
時には一晩ともたない。悪い人たちは
この交わりを恐れる。しかし善人は
死ぬ前に何日も墓の中に横たわる。

Briefly, *Doe as thou would'st be done unto,*
Love God, and Love thy Neighbour; Watch, and Pray.
These are the *Words, and Works* of life; This do,
And live; who doth not thus, hath lost *Heav'ns way.*
O lose it not! look up, wilt Change those *Lights*
For *Chains of Darknes, and Eternal Nights?*

要するに、人からされたいと思うように人にせよ、
神を愛し、あなたの隣り人を愛せよ。目を覚まして祈れ。
以上が世に処する言葉でありわざである。これをなせ、
そして生きよ。これをなさぬ者は、天国の道を見失っている。
おお見失ってはならぬ。見上げよ、あの光は
暗闇の穴や永遠の夜に変わるであろうか。

これに対して、ハーバートの「教会の玄関」の最後の2連は次の通りである。

76

Summe up at night, what thou hast done by day;
And in the morning, what thou hast to do.
Dresse and undresse thy soul: mark the decay
And growth of it: if with thy watch, that too
Be down, then winde up both; since we shall be
Most surely judg'd, make thy accounts agree.

77

In brief, acquit thee bravely; play the man.
Look not on pleasures as they come, but go.
Deferre not the least vertue: lifes poore span
Make not an ell, by trifling in thy wo.
If thou do ill; the joy fades, not the pains:
If well; the pain doth fade, the joy remains.

76

夜になれば、あなたが昼間したことを
そして朝は、これからすることを総括せよ。
あなたの魂の衣を着たり脱いだりしてみよ。魂の
衰退と成長に注目せよ。よく観察して、それも
すんだら、両方の締めをせよ。裁きを受けるのは
確実なのだから、あなたの帳じりを合わせるがよい。

77

要するに、勇敢にふるまえ。男らしくやれ。

悦楽がやってくるのを傍観せずに、こちらから動き出せ。

善行はささやかでも遅らせるな。つかの間の一生は

悲しみのうちに費やしても、寸尺にもならぬ。

悪いことをすれば、喜びは消えて苦しみは消えない。

よいことをすれば、苦しみが消えて喜びが残る。

ハーバートからヴォーンへの流入が、「規則と教訓」で最も著しいと思われるのが最後の部分である。ここに引用の「教会の玄関」の末尾から、‘Summe up at night, what thou hast done by day’ ‘thy accounts’ ‘In brief’ ‘lifes poore span’ が流れこんでいるのが感知されようし、その最後のカプレットが「規則と教訓」20連のカプレットに少しは反響しているかもしれない。しかし両者をよく比べてみれば、影響がかなり表面的なのが理解されるだろう。ハーバートは実際の倫理的心得を普遍的な観点から述べている。語句もリズムも抑制され、形式が整然としている。これに比してヴォーンの詩行は、神との関係を軸にしながら現実のテーマから踏み出した暗示的な表現が目だつ。語句とリズムの魔力を引きずって神秘的な領域に向かう傾向がある。実際の教訓とは言えない。社会性よりも個人性が強い。こうしたことはヴォーンの詩全体に当てはまる特色であろう。影響関係についてはさらに、20連のイタリックの行がハーバートの「日曜日」(*Sunday*)からの、そして21連は全体にハーバートの「教会の墓碑」(*Church-monuments*)からのエコーが認められる^⑧。これらのエコーも検討してみると、前者は‘Sun’を神的にうち出したヴォーン流の表現と化し、後者はテーマは同じでも死者との交わりに独自の死生観を表明している。太陽から墓へと途方もない話題転換のようだけれども、ヴォーンにおいては、夜の時間での天国の主および死者の霊との交通であり、むしろ手慣れた運びを感じさせさえする。20、21の両連とも、善(人)と悪(人)に言及して結ばれながら、その観念に便宜的な重みしか伴わないのは、両者との交わりの方に重点があるためで、ここにもヴォーンの教訓性の特殊さがのぞいている。詩は夜の眠りと死の色合いを濃くして、つづく二つの連(上には引用はない)へ

と移行する。寝床ではカーテンは閉めずに、目と魂を神の光の方に向ける。深夜に情欲の火は燃やさずに純潔を保つ。こうした教訓が、眠りと死の夜に神の存在を織りこみながら説かれる。暗い夜というのに、何と光のイメージに満ちていることか。これがヴォーンの常套なのである。その強い利かしの文句が、「神が宿るしばは燃えることがない」(That *Bush* where God is, shall not burn)であり、これが「出エジプト記」(3章2節)に拠ることは指摘のある通りだ^⑩。詩人は情欲を暗示しているのだが、夜における神の存在を印象づけるのに聖書的連関に依存するのは、ヴォーンが重視するもう一方の時刻、目覚めの朝と同様のことにだけに注目されてよいだろう。

最後の連はこの詩全体のまとめの形式をとっている。最初の1行は「マタイ伝」(7章12節)、2行目の前半は「ルカ伝」(10章27節)、後半は「マタイ伝」(26章41節)と「ルカ伝」(21章36節)の句である。ハーバートの「神性」(*Divinitie*)に倣っているのだが^⑪、そこでは '*Love God, and love your neighbour. Watch and pray. / Do as ye would be done unto*' となっている。そのあと「おお謎のような教えよ、まるで昼のように謎のような!」(O dark instructions; ev'n as dark as day!)とつづけて、解き難い教えであることをハーバートは強調する。ヴォーンはこの'dark'に誘われて同個所を引いたのかもしれない。ヴォーンの詩行の順序は、'Watch, and Pray'に強勢がかかっている。これこそこの詩の中心テーマである。『オリヴ山』のタイトル・ページに、「ルカ伝」(21章36, 37節)の引用がある——「この起こるべきすべてのことからのがれて、人の子の前に立ち得るように、常に目を覚まして祈れ。／イエスは昼は宮で教え、夜は出て行ってオリヴという山に宿りたもうた^⑫」。これは自らの散文を『オリヴ山』と題するゆえんを説明するものだが、「常に目を覚まして祈れ」とのイエスの教えに、ヴォーンが深く共鳴していることも疑えないであろう。「マタイ伝」(26章41節)の「誘惑に陥らぬように、目を覚まして祈れ^⑬」とともに、「規則と教訓」最終連の '*Watch, and Pray*'に通う。イエスが昼に教えて夜は祈ったことを知るヴォーンは、昼の教えよりも夜の祈りの詩人と言うべきか。最後のまとめに、聖書の第一義的教え(しかもハ

ーパートも詩に使った教え)を導入し、「目を覚まして祈れ」と掲げたのは、
 ‘Heav’ns way’の言及と併せて、この教訓詩の特質を明示するであろう。最終
 連にはまたもや光と夜が登場する——‘Chains of Darknes’は「ペテロ後書」
 (2章4節)に典拠がある^⑤。地獄か天国かと迫るわけであるが、‘dark’な教え
 が‘dark’な夜と重なって‘Eternal Nights’の句に行きついているのではない
 か。神秘的な陰影を残しながら詩は終わる。

ヴォーンの詩は構成に締まりがなく、段落や前後の関係がはっきりしないと
 評される^⑥。こうした見方を本論でも確認する結果となった。「規則と教訓」に
 おいてヴォーンらしさを発揮しているのが、以上の考察のように冒頭部と結末
 部にあるとすれば、ここでも彼が朝と夜の詩人であることが裏書きされた。こ
 こでもと言うのは、教訓詩でもという意味である。朝の詩はその賛歌と祈りで、
 ヴォーンの詩集を輝しく色どり、「朝番」のようなぬきんでた佳品が見られる。
 ところがこの「朝番」も、終りの三分の一が夜の眠りに関連し、もう一方のす
 ぐれた詩「夜」は、初めから終わりまで光がただようのである。闇と光が入り交
 じり、夜は明るく朝もほの暗いのが特色と言える。暗闇からの光を待ち望む詩
 人は、自然の被造物に神の姿を見ようとする。その自然の把握は思考や認識に
 よるのではなくて、驚異の念と感受性に従ったもので、自然を自然として描く
 よりむしろ、それと神との関係に焦点を合わせる。現世を超えた神秘的な感
 じが詩につきまとう。全く異質のハーパートに私淑しながら、神と被造の世界
 との関係では、教えられるところがほとんどなかったと指摘されるほど^⑦、この
 面はヴォーン独自の本領である。ところでハーパートの教訓詩が一般読者向き
 であるのに対して、ヴォーンのはごく限られた読者にしか用をなさない。気の
 きいた教訓的名言はまず見当たらない。ヴォーンは教えを受ける方向と受けた
 教えを指し示す。それはもっぱら自然と聖書に関る。「規則と教訓」で聖書の
 連関が朝と夜に集中して、昼間の部分には例外的にしか認められないのは注目
 すべきことだ。朝と夜はヴォーンの聖域と言える。そしてそれが昼間の世間を
 敵視する姿勢と無縁でないことは、上に述べた通りである。彼の聖域のモット
 ーは「目を覚まして祈る」にあり、これは社会的な平面の教訓には適しない。

ヴォーンは薄明の境にあって、ひたすら神に安住を願い求めたのだった。

本論のために主として使用した作品集は次の通り。

The Works of Henry Vaughan, 2nd edn., ed. L. C. Martin (Oxford at the Clarendon Press, 1957)

The Works of George Herbert, ed. F. E. Hutchinson (Oxford at the Clarendon Press, 1941)

注

① A. H. Thompson, *The Mystical Element in English Poetry (Essays and Studies, vol. VIII, Oxford at the Clarendon Press, 1922)*

② 特に次の詩行を参照のこと。

I wonder'd much, but tyr'd

At last with thought. (*Regeneration*, ll. 61-62)

And yet, as Angels in some brighter dreams

Call to the soul, when man doth sleep:

So some strange thoughts transcend our wonted theams,

And into glory peep. (*They are gone into the world of light!*, ll. 25-28)

③ L. C. Martin, *op. cit.*, p. 140. 'Neither did I thinke it necessary that the ordinary Instructions for a regular life (of which there are infinite Volumes already extant) should be inserted into this small Manuall, lest instead of Devotion, I should trouble thee with a peece of Ethics. Besides, thou hast them already as briefly delivered as possibly I could, in my Sacred Poems.'

④ L. C. Martin, *op. cit.*, p. 714. A. Rudrum (ed.), *Henry Vaughan: The Complete Poems* (Yale Univ. Press, 1981), p. 560.

⑤ L. C. Martin, *op. cit.*, p. 736.

⑥ A. Rudrum, *op. cit.*, p. 561.

⑦ 他人から借用すること自体は、当時の慣習だから大して問題にするにあたらない。ハーバートとの比較については、たとえば下記が要を得ている。

J. Bennett, *Four Metaphysical Poets* (Cambridge Univ. Press, 1953), p. 85.

D. Bush, *English Literature in the Earlier Seventeenth Century, 1600-1660*, 2nd edn. (Oxford at the Clarendon Press, 1962), p. 152.

⑧ L. C. Martin, *op. cit.*, pp. 714-18.

⑨ *Ibid.*, p. 190. 'Glory be to God on high, and on earth peace, good will

towards men!

- ⑩ *Ibid.*, p. 190. 'Blessed be God alone! / Thrice blessed three in one!'
- ⑪ F. E. Hutchinson, *op. cit.*, pp. 189, 199.
- ⑫ この点では下記が示唆に富む。
H. C. White, *The Metaphysical Poets* (Collier Books, 1962), p. 262.
- ⑬ ヴォーンの数少ない 'perfect whole' の詩として J. Bennett (*op. cit.*, p. 83) は「朝番」を, D. Bush (*op. cit.*, p. 155) は「朝番」と「夜」を挙げている。
- ⑭ H. C. White, *op. cit.*, p. 271.
- ⑮ L. C. Martin, *op. cit.*, p. 143. 'The night (saith Chrysostome) was not therefore made. that either we should sleep it out, or passe it away idly ... When all the world is asleep, thou shouldst watch, weep and pray ... we must prevent the Sunne to give God thanks, and at the day-spring pray unto him, Wisd. 16. It was in the morning that the Children of Israel gathered the Manna ... So soon therefore as thou dost awake, shut thy door against all prophane and worldly thoughts, and before all things let thy God be first admitted ...'
- ⑯ L. C. Martin, *op. cit.*, pp. 730, 737. A. Rudrum, *op. cit.*, pp. 537, 563. なお下記の説明も参考になる。
J. F. S. Post, *Henry Vaughan: The Unfolding Vision* (Princeton Univ. Press, 1982), p. 103.
- ⑰ D. Bush, *op. cit.*, p. 153.
- ⑱ A. Rudrum, *op. cit.*, p. 560.
- ⑲ *Ibid.*, p. 560.
- ⑳ L. C. Martin, *op. cit.*, p. 145. 'And to this end I do here resigne my body and my soul, with all the faculties thou hast bestowed upon both, into thy Almighty hands; Guide thou them in the works of thy Law, turne my eyes from all transitory objects, to the things which are eternal, and from the *Cares* and *Pride* of this world to the *fowles of the aire* and the *Lillies of the field.*'
- ㉑ A. Rudrum, *op. cit.*, p. 560.
- ㉒ キルケゴール『野の百合・空の鳥』(久山康訳):『キルケゴール著作集』(白水社)第18巻, p. 230.
- ㉓ 同上, p. 236.
- ㉔ L. C. Martin, *op. cit.*, p. 736. A. Rudrum, *op. cit.*, p. 561. これをヴォーンは「争闘」(*The Mutinie*)の終りに引用している。'To him that overcometh will I give to eate of the hidden Manna, and I will give him a white stone, and in the stone a new name written, which no man knoweth, saving he that receiveth it.'

- ㊥ L. C. Martin, *op. cit.*, p. 146. 'When thou art to go from home, remember that thou art to come forth into the *World*, and to Converse with an Enemy; And what else is the World but a Wildernesse?'
- ㊦ A. Rudrum, *op. cit.*, p. 561. 'Cast thy bread upon the waters: for thou shalt find it after many days.'
- ㊧ J. F. S. Post (*op. cit.*, pp. 190-1) にも言及あり。
- ㊨ A. Rudrum, *op. cit.*, p. 562.
- ㊩ 'Watch therefore, for ye know neither the day nor the hour wherein the Son of man cometh.'
- ㊪ L. C. Martin, *op. cit.*, p. 737. A. Rudrum, *op. cit.*, p. 562.
- ㊫ A. Rudrum, *op. cit.*, p. 562.
- ㊬ L. C. Martin, *op. cit.*, p. 737.
- ㊭ *Ibid.*, p. 137. 'Watch ye therefore, and pray always, that ye may be accompted worthy to escape all these things that shall come to passe, and to stand before the Sonne of Man. / And in the day time he was teaching in the Temple, and at night he went out, and abode in the Mount that is called the Mount of Olives.'
- ㊮ 'Watch and pray, that ye enter not into temptation.'
- ㊯ A. Rudrum, *op. cit.*, pp. 563, 680.
- ㊰ たとえば H. C. White, *op. cit.*, p. 287.
- ㊱ J. Bennett, *op. cit.*, p. 77.